

TWIN FLAME

2009.06.09

その日、私は、会社に行きたくなかったのです。

いつものように、朝、起きて。

いつものように、支度をして。

いつもの道を歩き、いつもの電車に乗る。

いつもの乗換駅に着いたとき。

私の足は、どうしても 電車を降りることができませんでした。

根っこが生えたように立ち尽くす私を、

乗客たちは 邪魔そうに 睨みながら 降りていったけれど。

私は 動くことが できませんでした。

降りるはずの駅が 遠ざかっていくのを見ながら、

私は、ようやく 重い身体を引きずって 車内の中ほどへ移動しました。

そして そのまま、長いこと 電車の揺れに 身を任せ、

現実から 目を背けるかのように、固くまぶたを下ろしていました。

北から南へ。

快速もないのに 長く続くこの路線の南端まで来たのは、初めて。

この頃には もう 車内は空いていて、

見るからにOL風の私の姿は、

窓の外を流れていく景色からも、妙に 浮いているように 感じました。

どうしよう。

欠勤の電話くらい、かけなきゃ。

終点で降り、バッグの中を かき回しましたが、

どうやら 携帯電話を 家に忘れてきてしまったみたい。

もう、いいわ。
今日は 誰とも、コンタクトしない。
自分のためだけに、一日を過ごそう。

そう決めると、気分とともに、
なんだか 空まで 明るく晴れ渡っていくようでした。

小さな駅を出ると、漂ってきたのは、潮の香り。

お嬢さん。
どうぞ、こちらへ。

懐かしい香りに いざなわれ、
猫のように くんくんと 鼻を空に 突き上げて。

私は、潮の香りを 道案内に、歩き出しました。

しばらく行くと、小さな丘がありました。

ヒールの足元が ちょっと 心配だけど。

ちょっと 息切れしながらも 遊歩道の階段を上りきると、
目の前には、碧く深い色の海が 広がっていました。

潮の香りから 予測はしていたものの、
とつぜん あらわれた海に、
私の唇は、なにも 発することができませんでした。

ようこそ、いらっしゃいました。

私を ここまで連れてきてくれた 潮の香りは、
道案内が終わった今、こんどは 海の邸宅の執事として、
私を 迎えることにしたようです。

お嬢さん、
こちらは、いかが？

執事は、海の見える特等席に、私を 案内してくれました。

ありがとう。

私は、潮の香りが連発する、「お嬢さん」という呼びかけに 照れながらも、
そこに そっと 腰を下ろし、
爽やかな風の中、ひとりで じっと 海を 見つめました。

どうぞ、ごゆっくり。

執事は、私の回りを ひとまわりして、
軽やかに、どこかへ 流れ去っていきました。

海は、不思議な存在です。

キラキラと光る海を 見ていると、
海を見ているのが、いったい 誰なのか、わからなくなってきました。

海を見ているのは、わたし。

だけど、海を見ている わたしを、
わたしの背後から観ている、だれかが、いる。

それだけでは ありませんでした。

海を見ている、わたし。

その わたしを、わたしの上から観ている、だれかが、いる。

波の音が、急に 耳に 響いてきました。

波の音を 聴いている、わたし。

だけど、波の音を聴いているのは、わたしでは、ない。

わたしの外側に、だれかが、いる。

わたしの内側にも、だれかが、いる。

私の内側は、奇妙な感覚に 包まれていました。

じんじんと伝わってくる、温かな、心地よい……

眠っているような、いつもよりも 醒めているような……

次第に広がっていく この感覚に 包まれて。

自分が その場所に座っている、という事実も 忘れて。

自分の中の、気体である部分だけが、身体を抜け出し、

空中に ぷかぷかと 浮遊するように。

私は、ただ、私が私であることを、楽しんでいました。

ふいに、自分の内側が 深まるのを、感じました。

どこかで知っている、この感覚。

ゆっくりと、背後から 誰かが 近づいてくるとともに、
その距離が狭まるにつれて、
私の内側も、しんと 深みを 増していくのが わかります。

私は、振り返って 見ることは、しませんでした。

足音が 聴こえたわけでも、ありませんでした。

気配を感じたわけでも、ありませんでした。

それなのに、
誰かが 後ろから、やってくる。

ときを 超えて。
遠い遠い、過去の世界から、誰かが やってくる。

まるで。

身体を持たぬ存在のまま、
この世界の言葉で言うところの「意識」というものだけが、
背後から そっと 近づいてくるような……

怖くは ありませんでした。

私は、ずっと前から これを望んでいたことを、
ようやく 思い出しました。

その「意識」は、
私の すぐ後ろで、立ち止まりました。

足もないのだから、立ち止まる、という表現は おかしいけれど、
たしかに、そこで 立ち止まりました。

ああ。
この「意識」は…

あのひとだ。

その「意識」は、私の隣へと、移動してきました。

音も立てず、風も起こさず、気配すら 感じさせずに。
パズルのピースが ぴたっと 収まるかのように。

私の隣に、立ちました。

ああ。
このひとは、やっぱり あのひとだ…。

いつのまに 目を閉じていたのでしょうか。

私は、ゆっくりと 眼を開けると、
隣に立っている「意識」を、
視線は向けずに、しっかりと 確認しました。

間違いありません。

私が、声に出さずに「YES」と言うと、
喉元で、シャラシャラと、銀細工の触れ合う音がしました。

私は 大きく うなずくと、
もういちど、そして 今度は はっきりと「YES」という言葉を
自分の胸に 投げ込みました。

すると、私の左隣に立っていた「意識」が、
その姿を あらわしました。

彼の温かい手が 私の肩に触れ、
私は、その、よく知っているけれども 見知らぬ男性を、
見上げました。

彼は、同じ高校時代を 過ごしたひとでした。

誰にも、もちろん 本人にも、
想いを打ちあけることなく 卒業してしまいました。

卒業して以来、
私たちが 顔を合わせることは、ありませんでした。

風の便りさえも 受け取ることは できませんでした。

彼のことを 忘れたことは なかったけれど、
会いに行こうとは、思わなかった。

まさか いまになって、私の目の前に あらわれるとは、
思ってもみなかった。

十数年の年月は、
彼の、黒くてさらさらな髪も、長い指をも、
そのままにしておいてくれました。

あの頃よりも、だいぶ背が高くなっているのが、意外でした。

それなりに年齢を重ねたのは一目瞭然だけれども、
不思議なくらい、彼は変わっていませんでした。

私が好きだった、彼のあの声も、そのまま。

そんなことに気づいたのは、まもなくでした。

ごめん……

彼が つぶやいたのと、
私が 喉から 声を 絞り出したのが、同時だったから。

ごめんなさい。

十数年ぶりの再会で、最初に交わす言葉が、
それ……ですか？

いつのまに 戻ってきていたのか、
潮の香りが、微笑みながら、私たちを からかいました。

私たちは、やっと目を合わせると、またすぐに逸らし、
ふたりして頬を赤らめました。

お互いに、相手が なにを 謝っているのか、
そして、それは、同じことを指しているのだ、ということも、
わかっているから。

もう、いいのです。

オトナになった 私たちは、
自分に素直になることを 覚えていました。

私たちには、これだけの年月が、必要でした。

失われた十数年は、無駄ではない。

私たちは、こうして ふたたび めぐりあうために、
長い旅を、それぞれ 続けてきたのだもの。

もういちど 目と目が合うと、
私たちは、どちらからともなく 手をつなぎ、歩き始めました。

あの頃から 素直になっていれば よかったのに、ね。

彼の手のひらが、そう言っていました。

うん。

私も、手のひらで お返事しました。

もう 道案内は、要りませんね。

潮の香りは、ちょっと寂しそうに 微笑むと、
執事の役を降り、海へと 戻っていかうとしましたが……

ふいに 私の胸元を 勢いよく 駆け抜けて、
風だけの持つ特別な力で
祝福の音を 鳴らしてくれました。

しゃらしゃらしゃら……

海は さらに 碧く深くなっていました。